



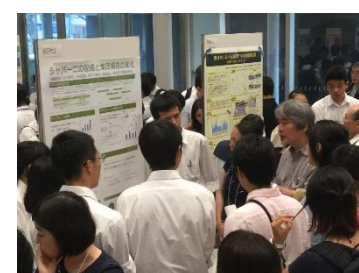
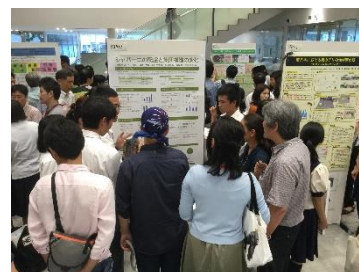
今回は**日本霊長類学会における発表と霊長類研究の活動**についてお伝えします。

◇日本霊長類学会での発表（7月16日）について

本年度7月16日、鹿児島大学で行われた第32回日本霊長類学会大会・中高生発表に3年生5名が参加し、研究者を前にプレゼンテーションを行いました。参加チームは全16校、いずれもハイレベルな研究内容でした。

本校チームは、中部学院大学の竹ノ下祐二准教授のご指導のもと、昨年8月より、東山動植物園のニシローランドゴリラ5頭の行動観察を計6回行い、その結果を発表しました。京都大学総長の山極寿一総長（右写真上・下）、同大の中村美知雄准教授ら、日本のゴリラ研究を主導する専門家を前に、生徒たちは緊張しながらも懸命にプレゼンを行いました。

質疑応答の中で、観察手法やデータ分析についての指摘や助言を多く受けました。さらに、研究構想の独創性や着想のユニークさに関する肯定的な評価もいただきました。山極総長からは、全体発表が終わったあとも、今後の研究課題について、具体的かつ丁寧なアドバイスをいただきました。生徒たちは夕方閉会近くまで会場に残り、専門研究者のポスターセッションに参加し、同じく参加した他校の生徒とも積極的に交流するなど、



有意義な時間を過ごしました。

参加した生徒はいずれも3年生であり、今回の発表をもって研究活動に一応の区切りをつけます。**1・2年生による新チームもすでに結成されており、彼らの始めた霊長類研究は後輩へと受け継がれることとなります**（左写真、竹ノ下先生の講義を受ける新チームの様子）。



今後は専門家から受けた数々のアドバイスや、自分たちの反省点をもとに新たな研究方針を立て、次年度学会での研究発表をめざして活動を行う予定です。

◇アジェンダ2030と生物多様性の保全 ～類人猿の森を守ろう～

今回紹介したゴリラ研究は、関高校が中部学院大、京大、日本モンキーセンターといった関係機関と連携して取り組んでいる霊長類研究の一環です。**霊長類研究の分野には、行動や形態、ゲノムといった理系分野のほか、思考や言語、家族や教育、社会論といった文系分野も含まれます。**われわれヒトも当然、研究対象です。人間を探究する上で、今や霊長類学の研究成果は不可欠です。



ところが、霊長類のうちヒト科属するチンパンジーやボノボ、ゴリラ、オランウータンといった大型類人猿の棲む熱帯雨林は、気候変動や乱開発で危機に瀕しています。「進化の隣人」ともいわれる大型類人猿は、あと数十年のうちに絶滅するともいわれています。

関高校SGHでは、国連の掲げるアジェンダ2030について学び、その具体的な解決に向けての研究活動を行います。アジェンダの中には、気候変動対策や生物多様性の保全が掲げられています。類人猿の保護もこの中に含まれる問題です。霊長類研究では、今後、気候変動、生物多様性、熱帯雨林と関わるフェアトレードやブッシュミート等の問題にも取り組んでいきます（写真上はモンキーセンターのマモル、下は東山のイケメンゴリラことシャバーニ）。



<学会発表に参加した生徒の感想>

- 高校生発表を見ても、一般発表を見ても、ゴリラを研究対象としているところが極端に少なく、ゴリラの生態解明は難しいものと感じた。しかしゴリラの生態は知れば知るほど面白いのは確かであるし、さらなる解明が必要と感じた。そんな**ゴリラの面白さやゴリラが危機に瀕していることを世間にもっと伝えてアフリカの熱帯雨林が守られるようにしていきたいと思った。**
- 我々の研究に対する専門家の評価は、「発想はユニークだがデータの説得力が弱い」「主観的すぎる」ということに尽きる。**データの少なさについては自覚もあり、尋ねられる覚悟もあったので、そのことについては想定内であったが、発想や研究構想についての肯定的評価があったことはかなり嬉しかった。**後輩には、僕たちの仮説の当否をデータではっきりさせてほしい。
- 今回の霊長類研究を通して多くのことが学べた。自分は将来、生物関係の研究職に就きたいと想っているので今回、学会まで行ける機会を与えていただきとても参考になった。また、**チームで協力して研究を行い自分とは違う考えを交流できたり、互いに試行錯誤して研究方法やデータまとめをしたりして、研究での協力の大切さを学ぶことができた。**今回研究への協力、われわれ生徒の自主性の尊重、そして学会という大きな場での発表の機会を与えていただけたことを、竹ノ下祐二先生に心から感謝申し上げたい。
- 以下は後輩へのメッセージ。今後は、キヨマサがどのようにリーダーとして成長していくのか、アイとアニーの関係はその後どうなっていくのかを見てほしい。また、シャバーニはリーダーとしては未熟であるため、その後どう変化していくのか、そして、その他の個体はシャバーニをどうとらえているのか、新たな疑問が出てきたので調べて行ってほしい。今回の僕たちの反省を踏まえて、やはりデータを主観的に見るのではなく、一つのデータをいろいろな角度から見て考察をし、そこから推測し、またそれを確かめるための観察をするといったような研究をして行ってほしいと思っている。そのためには、正確で有意なデータを取ることが大切だと感じましたし、**仮説通りのデータが得られなくても、なぜそうなったのか考え、また新たな仮説を立てて検証する必要があると思った。**
- 長時間の観察をはじめ、データの集計など、大変なことも多いが、今まで知らなかった人と出会えたことや、いろいろな研究をしている方に話を聞いたりすることはなかなかできない経験だった。**何よりも、自分で問題を見つけ、それを解決するための方法を自分で考えるというのは、将来きっと役に立つ経験になる。**この研究は、ゴリラの成長をとらえ、その集団構造の変化から人間社会の起源を考えるきっかけになると思う。そのためには長期的な観察が必要になるので、これから後輩たちに受け継いで行ってほしい。
- 竹ノ下先生、今回、我々の研究にお力添えしていただき、ありがとうございました。**観察の方法や科学的な考え方などを教えていただいたおかげで、最終的には自分たちで観察方法を考え、得られたデータから考察を得るという段階まですすめることができました。**今回は、やや主観的な見方をしてしまったので、次からはデータをいろいろな角度から見て推測し、その推測したことを確かめるための観察方法を考えるということを実践していきたいと思えます。
- 霊長類研究は得るものが多く、個人的にも非常に良い経験だった。ただ、他校の発表を聴いたり、交流したりするなかで、自分たちの研究にもまだまだ伸びしろがあることを実感し、今は主体的に関わることができないのが悔しくてたまりません。もう1年続けたかった。**私以外のメンバーはみな理系で、学んでいることも、知識も、興味を持つ内容も、私自身と全然違ってすごく刺激的だった。ひとりだけ文系で心細かったけど、霊長類チームに入る前と入った後では、知識が縦にも横にも広がり、自分の「強み」になった。**
(右写真上は東山動物園の佐藤獣医師、飼育員の方との記念撮影、下は霊長類学会でのポスター貼りの様子)

